

## 集団凝集性と心理的競技能力の関連性について —大学女子ハンドボール選手の場合—

檜 塚 正 一, 五 藤 佳 奈, 伊 達 萬里子, 田 嶋 恭 江  
(武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)

### Relationship between group cohesiveness and psychological-competitive ability: — Investigation of female collegiate handball players —

Shoichi Kashizuka, Kana Goto, Mariko Date, Yasue Tajima

*Department of Health and Sport, School of Letters,  
Mukogawa Woman's University, Nishinomiya, 663-8558, JAPAN*

#### Abstract

In the present study, we assumed that group cohesiveness influences game results and that psychological-competitive ability is a factor that promotes cohesiveness, and investigated the relationship between group cohesiveness and psychological-competitive ability for high- and low-ranked intercollegiate teams. The following findings were suggested.

“Closeness” and “Teamwork” were identified as factors to promote group cohesiveness. These factors were promoted through relationships between group cohesiveness and “confidence” and “tactical ability”, which are factors of psychological-competitive ability, and influenced game results and athletic performance.

Individual roles have great significance in group organizations, and failure of each member to fulfill his or her role would prevent the group from working and functioning. Therefore, in team sports, promotion of cohesiveness, and mutual understanding of goals among the entire team are essential for keeping the group and accomplishing tasks. is of great importance.

#### I. はじめに

私たちの周りには様々な集団があり、それぞれの原因によって集団の構造やそれに伴うまとまりにも違いが見られる。チームワークの良いチームは、斉一性が高く、連帯感があり、まとまっている、チームへの所属意識が強い、などの集団の統一性が観察される。これが集団凝集性と呼ばれるものである<sup>1)</sup>。集団凝集性は、「成員に集団にとどまるように作用する心理的力の総量」と定義される。しかしその力は集団内に魅きつけられる力と集団の崩壊に抵抗する力から構成される。また凝集性は、スポーツ種目によって、試合成績に及ぼす影響が異なる。球技のような相互作用種目では、凝集性が高いことと良い成績が結びつくと考えられている。阿江は(1985)スポーツ集団の凝集性について「対人魅力による凝集」と「所属・課題による凝集」の二つの因子を抽出している<sup>2)</sup>。競技レベルが高くなるにつれ、課題に基づく凝集力が大きくなり、逆に競技レベルの低下とともに、対人関係に基づく凝集力が大きくなると考えることができる。

ハンドボールという集団競技において、試合に勝つためには、個人の能力だけでなく、集団の能力を

発揮することが重要である。集団競技においては特に、チーム組織の運営や、個人の役割がはっきりしていなければチームの目標も達成されない。このことからインカレ出場チームに集団凝集性尺度を構成する5因子(メンバーの親密さ・チームワーク・価値の認められた役割・魅力・目標への準備)についての実態調査を行った。また集団を維持し、機能させるためには人間が絡み、運営する目標に対して凝集性を高める要因の一つとして、心理的競技能力診断検査 DIPCA.3 の5因子(競技意欲・精神の安定・集中力・自信・作戦能力・協調性)が高いチームほど試合中に望ましい心理状態がつかれ、よい成績と結びつき、集団凝集性尺度と試合成績の関連性が大きいと考えられる。そこで上位4チームと下位4チームに分け、これらの実態調査を行うこととした。

以上のことから、本研究では、ハンドボール競技におけるインカレ出場上位、下位チームの集団維持の機能における「集団凝集性」の実態と「心理的競技能力」の実態を把握し、凝集力を高めるための要因について明らかにすることを目的とした。また、集団凝集性と心理的競技能力の関連性が試合成績に影響すると考え、今後のチーム作りに役立てたいと思い本研究に取り組んだ。

## II. 研究方法

### 1. 調査期間

2002年11月14日～17日

### 2. 調査対象

大学女子ハンドボール選手(8大学)

平成14年度全日本学生ハンドボール選手権大会出場チーム(8チーム111名)

上位群 A大学:(17名) B大学:(16名) C大学:(16名) D大学:(20名) 計4チーム(69名)

下位群 E大学:(8名) F大学:(10名) G大学:(7名) H大学:(17名) 計4チーム(42名)

\*過去のインカレによる試合成績より、上位群と下位群に分類した。

### 3. 回収率

配布数 125部

回収数 111部

回収率 88.8%

### 4. 調査内容

#### 1) 集団凝集性検査(19項目/5因子)

阿江が作成した「メンバーの親密さ」、「チームワーク」、「価値の認められた役割」、「魅力」、「目標への準備」の5因子からなる集団凝集性尺度<sup>3)</sup>を採用し、集団凝集性の指標として使用した。

#### 2) アンケート調査(7要因/18項目)

集団凝集性に影響を与えるものとして、7つの要因を設定した。

① 「規則」…3項目を設定(「規則の有無」、「規則の理解」、「規則の順守」)

② 「部の目標」…2項目を設定(「部の目標」、「部の目標の共通理解」)

③ 「問題への対処法」…3項目を設定(「過去の問題の種類」、「対処法」、「問題解決の不可」)

④ 「役割」…2項目を設定(「役割の遂行」、「役割の機能」)

⑤ 「指導者」…2項目を設定(「指導者の有無」、「指導者との意思疎通」)

⑥ 「部の雰囲気」…3項目を設定(「部の権限構造」、「自主性の尊重」、「相互理解」)

⑦ 「ミーティング」…3項目を設定(「ミーティングの有無」、「欲求充足」、「ミーティングの効果」)

#### 3) 心理的競技能力診断検査(DIPCA.3)

スポーツ選手に必要な試合場面での心理的競技能力を診断している。52項目の質問からなり、Table 1のように12尺度と5因子の内容に分類される<sup>4)</sup>。

### 5. 分析方法

#### 1) 「集団凝集性」の実態調査

上位群と下位群において、阿江の集団凝集性尺度を用いて「集団凝集性」を分析した。図1はt検定を用いて行った。統計的有意水準は5%とした。

2) 「心理的競技能力」の実態調査

上位群と下位群において、「心理的競技能力」の因子についての実態を分析した。Table 2はt検定を用いて行った。統計的有意水準は5%とした。

3) 集団凝集性と心理的競技能力の関連性について

上位群と下位群において「集団凝集性」と「心理的競技能力」の関連性について分析した。Table 4～Table 8はスピアマンの順位相関係数の検定を用いて検討し、有意差が認められた因子に対して単回帰分析を行い、相関関係を調べた。統計的有意水準は、すべて5%とした。

### Ⅲ. 結果及び考察

#### 1. 上位群と下位群の集団凝集性の比較

集団凝集性(5因子「メンバーの親密さ」「チームワーク」「価値の認められた役割」「魅力」「目標への準備」の合計得点)について、戦績別に上位群と下位群を分類し、比較した(図1)。

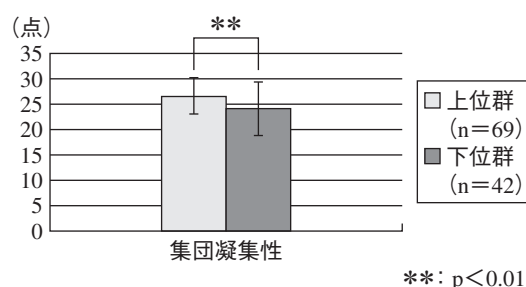


Fig. 1. 集団凝集性の上位群と下位群の比較

集団凝集性の値をみると、上位群のほうが高いことがわかる。t検定をした結果、上位群と下位群の間に1%の有意差が認められた。

チームのまとまりの良さや、目標の一致が試合成績に影響を及ぼし、試合に勝つための一つの要因であると考えられる。シャクターら(1982)は凝集性の高い集団は目標が生産水準を高めることや低めることは、凝集性の低い集団よりも共通の集団目標を受け入れ、あるいは同意する傾向がみられることを明らかにしている<sup>6)</sup>。よってアンケート調査より上位群の目標はインカレで上位の成績を収めることであり、下位群は一回戦突破や、大会に出場することを目標としていることから、「凝集性」が試合成績に影響することがいえる。阿江(1988)の先行研究によると、ゲームでのチームの凝集性は勝つと増加し、敗れると減少すること、ゲームごとに凝集性が変動すること、凝集性は安定度と大きさを要素としてもつこと<sup>7)</sup>が明らかとなった。

チームの成功と凝集性の関連については、凝集性の安定と増加の傾向が望ましいと思われる。ゲームを重ねるにつれ凝集性の増す傾向のあるチームが、良い成績への可能性を秘めているといえる。以上のことからチーム内の課題凝集を高めることが、試合成績の向上に貢献すると考えることができる。

1) 上位群と下位群の集団凝集性の因子の比較

集団凝集性の因子について、上位群と下位群を比較した(Table 1)。

各因子の得点は7段階評価で示され、結果は上位群、下位群共に平均点(3.5点)より高い得点を示していることがわかった。上位群は下位群に比べ、「メンバーの親密さ」、「チームワーク」、の得点がいずれも高く、t検定をした結果、「親密さ」では1%、「チームワーク」では0.1%の有意差が認められた。「親密さ」において、賀川(1979)<sup>8)</sup>によると「より緻密な役割指示的コミュニケーションを増加させるこ

Table 1. 上位群と下位群の凝集性の因子の得点

因子	上位群 (n=69)		下位群 (n=42)		t 値	p 値
	M	SD	M	SD		
親密さ	5.44	0.71	5.16	1.05	1.480	**
チームワーク	5.29	0.86	4.64	1.34	2.780	***
役割	4.37	0.87	4.33	1.03	0.196	
魅力	5.91	1.21	5.44	1.52	1.791	
目標準備	5.61	1.17	4.62	1.53	4.129	

\*\* p&lt;.01 \*\*\*: p&lt;.001

とによって、さらに高度化されたチームプレイが可能になり、ひいては高いパフォーマンスにつながるができると考えられる。」とあるように、メンバー同士が親密であることは対人的に相互作用やコミュニケーション能力があるということになり、試合での状況や成績を考えるとメンバーが親密であることが必要であると推測した。また、望ましい状態にできるかが重要であることが考えられる。阿江は<sup>2)</sup>相互作用課題でのみ、凝集性とパフォーマンスの正の関係が主張できると述べている。このことから、「親密さ」の値が高い集団は相互作用が出来ることから競技パフォーマンスにも影響していると考えることが出来る。

因子の比較において最も有意差が認められた因子は「チームワーク」である。遠藤(1984)<sup>5)</sup>によると、スポーツにおいては、集団の目的達成のためにチームワークが特に重視されている。チームワークには技術的側面と精神的側面の2側面が考えられ、技術的側面では、有効なプレーを導き出すために、ある場面でのメンバー間の期待がいかに一致するかが重要であり、また精神的側面では、士気、凝集性などが重要な要素となっている。このことから、試合で勝つためにはチームワークの両側面からの協同のバランスがいかにとれているかが重要なものと考えられる。さらに丹羽は(1972)<sup>9)</sup>、チームワークをつくり出す条件として、1) 集団目標 2) 促進的相互依存関係 3) 系列化をあげ、成員が集団目標を明確に認識し、受け入れ、集団目標への協力体制と協力の技術(心理的融合、協同的人間関係技術、個人的技術を連結する技術)を開発した。これは集団のコミュニケーションが正確に早くスムーズに行われ、凝集性や系列化を促進させることがチームワークを高める効果をもつと考えている。凝集性を高める要因として、チームワークの因子が高いことが示され、上位群にはこのような要因を持っていることが単なるレクリエーション思考でないといえ、競技思考であると考えられる。さらに Table 2 から 5 因子の中で、上位群の「魅力」の平均得点が最も高く、丹羽(1984)<sup>5)</sup>の、「集団に成員をとどめる原因を集団魅力にあるとする」考えに一致した。集団のもつ魅力は二つのカテゴリーに大別される<sup>6)</sup>。

(a) 集団の成員自身が魅力的であって、個々の成員は互いに関係をもつこと自体に喜びを見出し、それぞれ何かにつけて互いに支持し合い、全体としてそこにいる人々と何らかの社会的な交換関係に入ることを望んでいる場合。

(b) 集団の目標または当面する課題が個々の人々の目標や課題と合致し、それが集団の行為によって適切に処理される場合である。

いずれの場合も集団の魅力を増大させるいくつかの変数があるが、すべて集団として結合することを通じて各個人の要求の満足を高めるという性質をもっていると考えられる。(a)の場合は集団の目標や課題に魅力を感じているのではなく、メンバーの雰囲気や互いに協調関係を築くことに魅力があり、集団にとどまっていると推測でき、凝集力は高まるが試合への影響力は小さいと考えられる。(b)の場合は集団の目標や課題に対して魅力を感じ、達成させるために、その集団において力を発揮しようとしていると推測できる。この場合の魅力による凝集力は試合成績にも影響すると考えられる。このような二つのカテゴリーを阿江(1988)は「対人魅力による凝集」因子と「所属・課題による凝集」因子に分類して述べている<sup>7)</sup>。「魅力」において競技志向が大きい上位群は所属・課題による凝集が大きく、下位群は対人魅力による凝集が大きいことが考えられる。このような魅力についての違いも試合成績へ影響していると推測できる。阿江は(1985)<sup>2)</sup>所属・課題による凝集が大きいほど、試合成績がよいことが示された。



と明らかにしていることから、凝集性の中の魅力が試合成績に影響を与える要因に含まれると考えることができる。またこのようにチームに魅力があることは所属しているメンバーに魅力があることに繋がりが、より効果の高いまとまりを発揮することが出来ると考えられる。以上のことから「魅力」は凝集力を高める要因であり、試合成績にも影響するとして考えることができる。

## 2) 上位群と下位群の「心理的競技能力」の因子の比較

心理的「特性」を調べるため「心理的競技能力診断検査」の上位群と下位群の5因子について比較しTable 2に示した。

**Table 2.** 上位群と下位群の心理的競技能力の因子の比較

因子	上位群 (n=69)		下位群 (n=42)		t 値	p 値
	M	SD	M	SD		
競技意欲	63.90	8.85	57.57	10.79	3.360	***
精神の安定・集中	38.59	8.32	41.26	9.71	-1.540	
自信	22.72	6.01	20.62	6.39	1.750	
作戦能力	22.57	5.53	20.71	5.91	1.670	
協調性	16.75	2.13	16.07	2.93	1.310	

\*\*\*: p<.001

上位群と下位群をt検定して比較した結果、「競技意欲」の因子において、上位群と下位群の間に0.1%水準で有意差が認められた。

試合では競技意欲を高めておくことが大切であり、そのために具体的な目標を立てておくこと、勝つという意欲、闘争心を燃やすこと、忍耐力の発揮の仕方を身につけておくことが必要である。上位群にはこのような要素がチームにおいても個人の意識の中にも備わっていると考えられる。さらに上位群に所属する全てのチームは、選手層が厚く、リザーブがいるのに対し、下位群に所属するほとんどのチームは、リザーブがおらず、レギュラー争いが無い、動機付けの少ない環境にあることから、競技意欲の平均値や標準偏差の差が認められたと考えられる。しかし徳永(1996)の研究によると、「競技成績と「特性」としての心理的競技能力には関係が少ない<sup>10)</sup>という結果が出ていることから、心理的な「特性」として上位群における「競技意欲」の有意性だけでは試合成績との関係を認めることは出来なかった。

〈Table 3〉から上位群と下位群の平均値をみると、精神の安定・集中以外の因子は上位群の値の方が高いことを示している。今回の検査の自己プロフィールから上位群のほとんどの選手が、高校時代から全国大会などに出場経験があるのに対して、下位群の選手は全国大会への参加回数の少ない選手がほとんどであった。これは徳永の「同じスポーツ選手でも、大会の参加回数によって心理的競技能力が異なる<sup>10)</sup>という結果と一致したといえる。このことから心理的競技能力の結果は上位群と下位群の大会参加回数によって異なると考えられる。競技意欲以外の因子において有意差は認められなかった、これは上位群と下位群の間に大きな差がないことが伺える。

以上のことから心理的競技能力を高めるためには、各個人が自ら意欲を高め、チーム全体で競技への関心や魅力を追求し、互いによい方向へ導くことが出来れば、心理的競技能力のレベルも高くなることが考えられる。

## 3) 集団凝集性の因子と心理的競技能力の関連性について

集団凝集性と心理的競技能力の関連性を見るため、上位群と下位群における集団凝集性の因子(親密さ、チームワーク、役割、魅力、目標準備)と心理的競技能力の因子(競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性)においてスピアマンの順位相関係数の検定をかけ、有意差が認められた因子に対して単回帰分析を行い、相関関係を調べた。

### (1) 集団凝集性の因子と心理的競技能力の「競技意欲」との関連性について

上位群で競技意欲と相関が認められた因子は「親密さ」、「チームワーク」の2因子と凝集性であった。2つの因子と凝集性において1%水準で正の相関が認められた。次に下位群において相関が認められた

因子は「親密さ」, 「チームワーク」, 「役割」, 「目標準備」の4因子と凝集性であった。「凝集性」と「役割」では0.1%水準で、「親密さ」には5%水準で、「チームワーク」と「目標準備」では1%水準でそれぞれ正の相関が認められた。このことから上位群より下位群の方が競技意欲と相関関係がある因子が多いことがわかった(Table 3)。

下位群に0.1%水準で正の相関がみられたことから、試合成績にも影響することを推測したが結果は異なった。以上の結果より、下位群はチームがまとまっている状態に対して競技意欲が高まることが伺える。

また、競技意欲と最も相関が強く表れた因子は下位群の「役割」であった。これは「価値の認められた役割」があることによって、自分の役割を自覚し、果たそうとする働きが動機づけとなり、競技意欲と強い関連性を見出していることに繋がると推測できる。このような結果から集団凝集性と競技意欲の関連性ではチームのまとまりと競技に対する個々の取り組みが関連しているかが伺えた。

#### (2) 集団凝集性の因子と心理的競技能力の「集中力」との関連性について

上位群で集中力と相関が認められた因子は「親密さ」, 「チームワーク」, 「役割」の3因子であった。「親密さ」には0.1%水準で「チームワーク」と「役割」には1%水準でそれぞれ正の相関が認められた。下位群では「役割」に弱い正の相関がある傾向が伺える。このことから下位群においては集団凝集性と集中力の関連性は低いことがわかる。Table 4より上位群の「親密さ」の相関係数が最も高いことが示された。これは部員間のつながりが大きいことで、部が集団としてまとまり、メンバーが親密であることが精神の安定・集中と関連を持つことになったと考えられる。永田(1982)は「ある集団は他には見られない一種の「親密さ」や目標に対する一致した態度を持つことがあるように思われる<sup>6)</sup>。」と述べている。集団全体の目標に対して、個人がその目標達成の為に、自分に課された課題を克服することは、集団に対しての一致した態度を示すことになる。つまり、親密さと集中力の関連性においては、客観的に考えられる安定した気持ちと、物事に取り組む集中力が目標達成の為に効果を上げ、メンバー同士の共通理解が関連し、試合で成功するために重要であることが考えられる。

#### (3) 集団凝集性と心理的競技能力の「自信」との関連性について

上位群では「自信」において凝集性と因子に関連性が見られたのは「役割」, 「魅力」, 「目標準備」の3つの因子と凝集性であった(Table 5)。「凝集性」では1%水準で正の相関が見られた。「役割」には0.1%水準で、「魅力」と「目標準備」においては5%水準でそれぞれ正の相関が認められた。その他の因子において有意差は認められなかった。徳永は、「自信とはある行動をうまく遂行できるという信念。自信のある選手は自分の成功を信じ、必要なことが行えるという自分の能力を信頼している。」<sup>10)</sup>と述べているように自信があるプレーはプレッシャーのもとでも、実力を発揮できるということに繋がると考えられる。さらに上位群は「役割」との関連性が強いことから、チームで認められた明確な役割があり、必要な行動をうまく遂行できると考えられる。このようなことから集団凝集性と自信との関連性ではチームの伝統や誇りがあることの自信と、下位チームには負けられない、必ず勝てるという信念、また競技において実力を持つ個人の自信がチーム全体に伝わり、チームがよりまとまった状態になると考えられる。このようなことに基づき凝集性と関連性が見られた上位群は自分の成功とチームの成功を信じ、ゲームに望んでいると考えられ、試合成績にも影響しているといえる。

下位群では全ての因子に正の相関は見られたが、有意差は認められなかった。これは競技に対する個々の自信の小ささと、その集団での実力発揮に不安な状態であることが伺える。チームでの役割が、プレーの中ではうまく活かされず自信に結びつくことが出来なかったと考えられる。結果より、上位群では自信と凝集性の関連性があることから、下位群のこのような特徴が全国区での試合場面において特に影響を及ぼしていると考えられる。

#### (4) 集団凝集性の因子と心理的競技能力の「作戦能力」との関連性について

「作戦能力」と関連性があった集団凝集性の因子は、上位群では「親密さ」, 「役割」, の2つの因子と凝集性において関連性が認められた。「凝集性」と「親密さ」には5%水準で、「役割」には0.1%水準でそれぞれ正の相関が認められた(Table 6)。下位群では「役割」において1%水準で正の相関が認められた。

上位群, 下位群ともに関連性が見られた「役割」の因子において, これは組織的な役割分担が出来ており, 各々の役割を遂行していることが考えられる。個人が自分自身の役割を明確に理解していることが, ゲームにおける作戦能力と関連すると推測される。また, 〈Table 7〉より上位群の値が高く有意差があることから, 試合成績にも影響すると考えられる。徳永は, 「作戦能力は予測力や判断力から成り立っている。試合で起こりそうな場面をすべて予測して, それに対してどのような対策が必要かを判断して, あらゆる作戦を立てる。」<sup>10)</sup>と述べていることから作戦能力は試合において極めて重要であることがわかる。以上のことから集団凝集性と作戦能力の関連性では, 役割や親密さの因子と作戦能力との相関において, ゲームを想定した場合に重要な要因であることが考えられる。

(5) 集団凝集性と心理的競技能力の「協調性」との関連性について

上位群で協調性と相関が認められた因子は「親密さ」, 「チームワーク」, 「魅力」の3因子と凝集性であった。「親密さ」では0.1%水準で, 「凝集性」と「チームワーク」と「魅力」では1%水準でそれぞれに正の相関が認められた(Table 7)。下位群ではすべての因子において相関がみられ, 「凝集性」, 「親密さ」, 「チームワーク」, 「魅力」, 「目標準備」において0.1%水準で, 「役割」では1%水準でそれぞれ正の相関が認められた。協調性と集団凝集性の関連性には上位群よりも下位群の方が, 相関関係が強いことがわかった。

上位群に比べ高い値を示したのは下位群の「魅力」の因子であった。阿江は「レクリエーション志向では, 社会的感情が好意的で, 対人魅力による凝集が大きい, 競技志向に比べると, 所属・課題による凝集が小さい。逆に, 競技志向では所属・課題による凝集が大きく, 対人魅力による凝集は低い。競技志向の集団が, 集団内の対人関係よりも, 所属・課題の側面を重視していることを示すものであると考えられる。」<sup>2)</sup>と述べていることから, 前述した下位群においては対人魅力による凝集が示され, レクリエーション思考の選手が多くいると推測される。結果より, 協調性との強い関連性にはこのようなチームに対する魅力の意味が含まれ, それによって互いに協調しあい, 凝集力も高まると考えられる。

上位群とは集団に所属する目的意識が異なっているといえる。Table 7より下位群においてかなり高い正の相関が表れていることがわかる。徳永は, 「協調性はチームワークを大切にする。励ましあってプレーする。団結心がある。協力してプレーする<sup>10)</sup>。」という特性を述べている。このことから協調性は集団競技には欠かせない重要な特性であることがわかる。下位群の選手には凝集性と協調性に関連性が強く, チームとして団結力があると考えられる。試合では個人の技術が優れていても, チーム競技の中では協調性のある人間が固まった方が, チームが崩れかけた時に, 互いに励まし合い, 協力することで, 良いプレーに結びつくと考えられる。しかし息詰まった時いつも周りの力に頼って勝利には結びつきにくいこともあると自覚しておかなければいけない。

以上の結果から凝集力と協調性では同じ意味をもつ因子であるが, 強い関係を持つことで互いに信頼関係が生まれ試合での団結力が勝利を左右する場面も出てくると考えられる。

Table 3. 集団凝集性の因子と「競技意欲」との関連性

因子	競技意欲			
	上位群(n=69)		下位群(n=42)	
	R	P	R	P
凝集性	0.305	**	0.469	***
親密さ	0.319	**	0.348	*
チームワーク	0.296	**	0.415	**
役割	0.281		0.509	***
魅力	0.281		0.287	
目標準備	0.218		0.398	

\*: p<.05 \*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001

Table 4. 集団凝集性の因子と「集中力」との関連性

因子	集中力			
	上位群(n=69)		下位群(n=42)	
	R	P	R	P
凝集性	0.250		0.164	
親密さ	0.418	***	-0.077	
チームワーク	0.290	**	0.027	
役割	0.296	**	0.274	
魅力	0.180		0.187	
目標準備	0.051		0.234	

\*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001



**Table 5.** 集団凝集性の因子と「自信」との関連性

因子	自信			
	上位群 (n=69)		下位群 (n=42)	
	R	P	R	P
凝集性	0.350	**	0.157	
親密さ	0.222		0.100	
チームワーク	0.198		0.206	
役割	0.379	***	0.280	
魅力	0.235	*	0.044	
目標準備	0.236	*	0.144	

\*: p&lt;.05 \*\* : p&lt;.01 \*\*\* : p&lt;.001

**Table 6.** 集団凝集性の因子と「作戦能力」との関連性

因子	作戦能力			
	上位群 (n=69)		下位群 (n=42)	
	R	P	R	P
凝集性	0.242	*	0.023	
親密さ	0.264	*	-0.119	
チームワーク	0.174		-0.037	
役割	0.425	***	0.392	**
魅力	0.208		0.002	
目標準備	0.124		0.045	

\*: p&lt;.05 \*\* : p&lt;.01 \*\*\* : p&lt;.001

**Table 7.** 集団凝集性の因子と「協調性」との関連性

因子	協調性			
	上位群 (n=69)		下位群 (n=42)	
	R	P	R	P
凝集性	0.359	**	0.656	***
親密さ	0.510	***	0.629	***
チームワーク	0.348	**	0.527	***
役割	0.233		0.365	**
魅力	0.283	**	0.603	***
目標準備	0.154		0.554	***

\*\* : p&lt;.01 \*\*\* : p&lt;.001

#### IV. まとめ

本研究では、「集団凝集性」が試合成績に影響していることと凝集力を高める要因には「心理的競技能力」が関連していると考え、集団凝集性と心理的競技能力の関連性に着目し、インカレ出場チームの上位群と下位群を対象に調査を実施した。調査結果は以下の通りである。

1. 集団凝集性の調査結果より、集団凝集性は安定と増加の傾向があると、良い成績へつながる可能性があるといえる。因子分析の結果では、上位群は「メンバーの親密さ」が相互作用課題を発揮し、「チームワーク」においては、精神的側面において凝集力を高め、それぞれに競技パフォーマンスに強い影響を及ぼしていることがわかった。また、「魅力」について、上位群は所属・課題による凝集があることに對して、下位群は対人魅力による凝集があり、互いに凝集力を高める要因であるが試合成績に影響するのは上位群であることがわかった。
2. 心理的競技能力診断検査の結果から、下位群は全国大会レベルの試合経験、出場回数が少ない為、上位群と検査結果に差がみられたことがわかった。さらに競技成績と「特性」としての心理的競技能力には関係の少ないことがいえる。
3. 集団凝集性と心理的競技能力の関連性の結果から、上位群の特徴としては、集団凝集性と「自信」、「作戦能力」において、試合に影響する関連性が見られた。特に集団凝集性の因子である「役割」が試合場面に影響する重要な要因であったといえる。下位群の特徴としては、集団凝集性と「競技意欲」、「協調性」において、凝集力を高める強い関連性が見られた。集団凝集性の因子である「役割」、「目標準備」がそれぞれの目標に一致したまとまりをつくっている要因であることがわかった。

以上の結果から、集団凝集性を高める要因は「親密さ」と「チームワーク」であり、心理的競技能力の因子である「自信」と「作戦能力」が集団凝集性と関連していることで高くなり、試合成績や競技パフォーマンスへの影響していることがわかった。集団の組織の中で個々の役割は大変重要な意味を持ち、それぞれに役割を機能させなければ、集団はまとまらず、運営出来ないと考えられる。チーム競技をしていく



上で、集団の維持や課題遂行には、凝集力を高めることが必要であり、目標に対してチーム全体の相互理解が重要である。

今回は大学女子ハンドボール選手を対象としたが、今後は他のスポーツ集団においても調査を行い、集団凝集性と心理的競技能力の関連性について要因を明らかにすることが望ましい。

## V. 引用・参考文献

- 1) 松田岩男 杉原隆(編著) 1999 新版 運動心理学入門 大修館書店 255-4
- 2) 阿江美恵子 1985 集団凝集性と集団志向の関係及び集団凝集性の試合成績への効果 阿江美恵子体育学研究 29 巻 4 号 315-323
- 3) 阿江美恵子 1986 集団凝集性の再検討 スポーツ心理学研究 13 巻 1 号 116-118
- 4) 徳永幹雄, 橋本公雄: 心理的競技能力診断検査用紙(DIPCA. 3 中学生～成人用). トーヨーフィジカル発行, 1994
- 5) 日本スポーツ心理学会(編) 1984 スポーツ心理学 Q&A 不味堂出版
- 6) J. H デーヴィス著 永田良昭(訳) 1982 集団行動の心理学 誠信書房 pp.165-167
- 7) 阿江美恵子 1988 チームゲームを科学する チームゲームと集団凝集性 ゲームによる凝集性の変化 96-99
- 8) 松田岩男, 加賀秀雄, 賀川昌明: スポーツと競技の心理, 大修館書店, 1979
- 9) 丹羽劭昭 1972 チームワークの理論的研究 体育集団の研究 タイムズ
- 10) 徳永幹雄著 1996 ベストプレイへのメンタルトレーニングー心理的競技能力の診断と強化ー大修館書店